



「社交性」の振幅と「影の形象」の基層性：一九二〇年代のドイツ語圏社会学界におけるジンメル社交性論の受容（特集1 社会学的説明か「社会学的言い訳」か：個人と社会をめぐる現代の議論から）

田村， 豪

(Citation)

社会学雑誌, 40:98-122

(Issue Date)

2023-12-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100486325>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486325>



特集1 社会学的説明か「社会学的言い訳」か——個人と社会をめぐる現代の議論から

「社交性」の振幅と「影の形像」の基層性

——一九二〇年代のドイツ語圏社会学界におけるジンメル社交性論の受容——

田村 豪

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程

序

「社会学的言い訳」を社会学史・学説史研究の視点からみた場合、伝統的な「個人／社会」図式をめぐる議論が想起される。つまり、その制度上での確立期を説明するため「個人か社会か」の問題を設定し、そこから社会学史を説明していくことは通説となっている。そして、これにたいしてゲオルク・ジンメルがどちらにも還元できない立場をとったこともまたよく知られている。ジンメルの立場は、しばしば個人か社会かの二者択一ではない。つまり一切を社会に還元することも一切を個人に還元することもない第三の立場をとるものだとして（正村、二〇一〇、Thouard und Frank, 2021）。

ジンメルの社会学思想、とりわけ形式社会学のなかでも

ジンメルが晩年に力点を置いて論じたのが社交性という主題である。本稿ではこの第三の立場を明確に示したものとしてジンメルの社交性論をとりあげ、一九二〇年代のドイツ語圏における受容史を扱うことによって、既存の研究のなかでは十分に扱われてこなかった論点を析出する。この論点は政治的対立の激化や社会学の基礎づけ・制度化といった状況との応答のなかで明らかになるものであり「社会学的言い訳批判」研究を深める一助となろう。

これを問いかたちにかたちを直せば、ジンメルの社交性論は政治的対立の激化のなかで制度化を目指したドイツ語圏の社会学界のなかでどのように受容されたのか、そしてその受容から逆照射される場合のジンメル社交性論の論点とは何かというものだ。

この問いは、ジンメルの社交性論をめぐる研究状況から

生じたものだ。ジンメル社交性論へのアプローチは大きく二つのパースペクティブからなされている。ひとつはジンメル研究というかたちで、ジンメルが論じた哲学、社会学、美学・芸術学 (Miller, 2018: 60, cf. 田村, 二〇二二b) との連関のなかで論じられる。ふたつは「社交性」へと注目することで、概念史や社会学史・学説史といったかたちでジンメルの社交性論をとりあげるものである(岡澤, 一九九三)。以下簡潔に二つの視座からみた社交性論を示しておく。

第一のジンメルの社交性論読解での論点は、その場にいる人びとが自他の距離を意識的に確保するというものだ。つまり自らの感情を統御し相手との距離をうまく取りながら会話を進めていく点をジンメルの社交性論の本質に読み込み、人間関係としては親密性にかかわるものとする。そしてこうした自他の距離を保持したまま楽しみをもつて相互作用を積み重ねていくという論点が現実との距離の問題になり、社交性論は理念的社会を示す。そしてそれは近代における自然と文化との分裂にたいする調和を示す美的・感性的なニュアンスを強く帯びている。⁽³⁾

第二に「社交性」へとより注目するパースペクティブでの論じ方は二つに大別できる。まずは、とくに哲学史や概念史研究でとりあげられる場合であり、ジンメル以前の社交性論、とりわけ一八〇〇年前後の社交性論とのつながり

が示される。⁽⁴⁾ この第一の扱いに準ずるものとして、ジンメルの直前ないしは同時代の社交性についての言説とのつながりが指摘される場合がある。第二に、社会学説史においてジンメルの社交性論を特定の学説の起点とみるものがある。社交性論の比較的直接的な展開として論じられてきたのは、ドイツ語圏におけるヘルムート・プレスナーの社会学論への展開とアメリカ社会学におけるアーヴィング・ゴフマンの相互行為論への展開である。プレスナーは社交性に左右の社会急進主義にたいする対抗を見出しており、ジンメルとプレスナーとの連続性が指摘されている (Albrecht, 2018: 250)。ゴフマンへの展開においては、ジンメルが他の相互作用の形式から区別した社交性論が、社会学における一般的な相互行為論へと転換される (田村, 二〇二〇、Fischer, 2021: 490-1)。⁽⁵⁾

このように既存の研究を整理していくと、ジンメルの社交性論としての研究の蓄積にたいして (詳細は註1を参照)、その概念史や社会学史・学説史上での扱いの「温度差」ともいえるものが浮かび上がってくる。つまりジンメルの社交性論をめぐる言及の多さや議論の密度にたいして、社交性概念の方から接近した場合には、一八〇〇年前後が概念史研究としては中心となり、ジンメルが社交性について論じた事実の指摘ないしは論点の存在の指摘にとどまっている。社会学説史としてはジンメルの社交性論のもつ先駆

性以上のものを指摘できているとも言えない。とりわけ社会学史にとってジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性論は、第一回社会学者大会という記念碑的場面で論じられたにもかかわらず社会学史研究においてほとんど言及されていない（cf. Lichblau, 2018: 23-6, Meibius, 2021）。

ということは第一に必要な作業は、後者の視点から前者の深度をもってジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性論へと迫ることだ。そうした作業を積み重ねることでジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性論が社会学史の定説にたいする別様の見方、とりわけ社会学の成立史に社交性が深く関与していることを示してくれるだろう。本稿はこの作業の一環となる。この作業が意味をもつのは、一九二〇年代にジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性論を読んだ、社会学にコミットしていた人びとは、学科の制度化や基礎づけへの志向をもちながら、一方でそれをジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性論として読み、他方で彼らがジンメル（Johannes Heinrich Meier）抜きで考える社交性という用語もまた念頭においていたはずであるからだ。つまりジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性論の学問への寄与を踏まえながら、ジンメル（Johannes Heinrich Meier）の書いた社交性論を読解すると同時にその当時にもたれていた社交性という言葉のニュアンスをその読解にもちこんでいたはずだ。社会学の学科化が進む過程でジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性論を受け継いだ人たちが、そのなかで何かを見逃したからこそ、社会学史・学説史上でのジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性論の位置づけが霞んでしまっているのではないか。裏を返せば

その受け継がれなかった論点から、ジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性論が社会学史のなかで位置づけられる潜在的可能性が浮かび上がるのではないか。そしてそれは既存のジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性読解で十分に焦点化されてこなかった論点を浮かび上がらせてくれるのではないか。

この問いに答えるために、一節において、ドイツ語圏の社会学界の状況を確認するとともに一九二〇年代にロマン主義者の社交性を痛烈に批判したカール・シュミットの議論を導きの糸として、『社会学の根本問題』の書評を検討する。ジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性論は、概念としての社交性でありサロン文化でもあるもの、公共性の言説から距離を取るものとして読解されていることを指摘する。次に二節においてレオポルト・フォン・ヴィーゼ（以下「ヴィーゼ」）とアルフレート・フーアカントの社交性をめぐる議論を参照する。社交性という概念自体は人間関係における基層であり、学科を成立させる概念性が強いのにたいして、ジンメル（Johannes Heinrich Meier）の論じる社交性は実態との距離のなかで捉えられ、時代に即さないものとされていく。三節ではオートマール・シュパンの普遍主義社会学における社交性を検討し、ジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性論を批判しながらも、フーアカントとは異なっており、たんなる概念ではなく、歴史性を帯びたリアルな形成力として社交性が捉えられている点を指摘する。四節ではこれらの論点をジンメル（Johannes Heinrich Meier）の社交性論と対峙させ、社交

性概念の幅の広さを指摘するとともに、既存の研究では十分に論点とされてこなかった「影の形象」という点を指摘する。

一 『社会学の根本問題』への書評と社交性への批判

よく知られているように一九二〇年代のドイツの社会状況は政治的対立の激化として描かれる。「一九二〇年代のドイツの社会科学者は極度の緊張と不安定の雰囲気の中で研究した」。政治や経済、社会について語ることが、そのまま政治的立場に直結しており、一見すると政治的立場とは無関係に思われる学問上の方法論でさえも一九二〇年代を通して徐々に特定の立場に立つものだと明らかになっていった (Ringer, 1969 = 一九九一: 一五二)。

こうした状況のなかで冒頭の「言いつ批判」の論点と非常に類似した「個人と社会」の問題が繰り返された。エルンスト・ロベルト・クルティウスは一九三二年に、マンハイムの『イデオロギーとユートピア』にたいする書評を記している。クルティウスによれば、この十年、つまり一九二〇年代のドイツ語の語彙に「集合的 (kollektiv)」という「奇妙な新語」が付け加えられた。こうした言葉の追加によって「個人 (Individuum)」の弱体化が狙われてい

るという。クルティウスはこの集合的を社会的と言い換え、個人と社会との二つの語彙の背景にはギリシア以来繰り返されてきた、「社会は個人に対して……価値の優位をもつものなのか、あるいはその逆なのか」という問題があるとする。そしてシュミットの『政治的なものの概念』(一九三二)を引用して、この問題の変容を指摘する。すなわち近代以前は国家が最上級のものでされていたがゆえに、個人と社会の問題は理論的問題に過ぎなかったのだが、近代以降、国家と社会とが分離するなかでこの問題は、政治的な次元で議論されることになった (Curtius, 1932 = 一九八七: 八五・七)。

まだ学科として成立していなかった社会学は、こうした状況のなかで自らの立場を制度上で確保しなければならなかった。しかし社会学の科学化を進めるために既存の他の学問に範をみたこともあり、二十年代の社会学の内実は非常に多元的なものだった (Freye, 1931 = 一九五五: 一二〇・一、Habermas, 1989 = 二〇〇六: 二〇三・四)。そのなかで学科の制度化のために効力を有したのがヴァーゼによる形式社会学である。ヴァーゼは「価値自由」をめぐる学会の混乱状況にたいして、自ら仲裁者の役割を果たそうとし、厳密な客観性をもつて、政治的中立性を保とうとした。結果的に政治的中立性の表明は、社会学を制度的に定着させるために、そしてドイツ社会学会の統合のために重

要な戦略となった(茨木、一九八四:三九以下、Mochius, 2017=二〇一八:三八・九)。

では形式社会学がドイツ社会学界の中心へと向かっていく流れがあったなかで、ジンメル⁽⁹⁾の社交性論はどのように扱われたのだろうか。まず検討可能なのは、社交性論が収録された『社会学の根本問題』(一九一七)⁽⁸⁾への書評における扱いだ。ドイツ語で書かれた八つの書評は、その長短に大きなばらつきもあれば書評における紹介内容の選択も定まっていない。ここでは『社会学の根本問題』第三章「社交性」への言及から二つの点を指摘する。

第一に基本的には、社交性は形式社会学ひいては社会学の確立との関係のなかで論じられている。エルンスト・トレルチによると一九〇八年の『社会学』が非体系的であったのたいして、『社会学の根本問題』は社会学の体系性が提示されている。トレルチが読み取った体系は三つの主要課題から構成されており、「①個人と集団との関係についての一般理論、②集団形成についての自然な形式法則と条件性、③理念や価値に適用社会形成の傾向」である(Troeltsch, [1919] 2010: 461)。個人と集団との水準の差を扱う二章が①にあたり、十八世紀の個人主義から生まれる社会観、十九世紀の個人主義から生まれる社会観とが論じられる四章が③だとすると、三章の社交性は②に該当するといえよう。「自然な形式法則」が示すところは確定し得

ないが、社交性論は社会学という学問体系のなかに位置づけられている⁽⁹⁾。またフーアカントは、現実から距離をとり「教義学やディレッタンティズムをきわめて容易に避ける」ことで、個別科学としての社会学が成立すると考える。そしてそれに適うのが社交性のような遊戯である。だからこそフーアカントは社交性の章について「ジンメルはここ(純粹・形式社会学)に、テンニースやトレルチや短評者「フーアカント」といったその他の専門家たちと同じく社会学の中心領域を認めている」とみなす(Viekandt, 1919: 100 亀甲括弧内は訳者)。

第二に、社交性論の中身が「サロン社会」と言い換えられ、さらには「良く知られた現象」とされている点だ(D, 1919: 190)。フーアカントは社交的集まりのことを「サロンの集まり (Salongesellschaft)」としていることから、『社会学の根本問題』の読者からしてみれば、社交的集まりは比較的身近な現象でイメージの付くものだったことが推測できる(Viekandt, 1919: 100)。実際にジンメルの社交性論について自身で主催していた社交サロンとのかかわりは指摘されている⁽¹⁰⁾。十八世紀末から二十世紀前半までのベルリンのサロンについてのモノグラフを記したペートル・ヴィルヘルミー・ドリンガーは、サロンを「自由で制約のない社交を表し、文学や芸術、政治的なテーマなどについての会話がその基盤となっている」ものとしている

(Wilhelmy-Dollinger, 2000 = 二〇〇三: 六〇)。こうしたサロンは既成の市民社会の秩序から距離を取るものでもあって「市民的公共圏とは別の言説空間」を形成していた(西村、一九九八、大貫、二〇〇一: 八四)。そして、そうした集まりの内実の差異をひとまず置いておけば、一九〇〇年前後の世紀転換期には実際に社交的な集まりがきわめて数多く存在していた。マックス・ヴェーバーは一九一〇年の第一回ドイツ社会学者大会において団体についての研究を推進すべきだとしている(Weber, [1910]1924 = 一九八二、Hoffmann, 2006 = 二〇〇九: 九七以下)。十八世紀後半から十九世紀初頭にかけて隆盛を極めたベルリンのサロン文化もまた——もちろん最盛期のサロンに比べればその存在感は大きくはないにしても——単純に「衰退した」とは言えないのだ(Wilhelmy-Dollinger, 2000 = 二〇〇三: 五一・五七)。¹⁾の二つの特徴から、ジンメルの社交性論は、公共性から一定の距離をとる空間としてのサロンを範として、そこに政治的言説に還元されない学科の成立を重ねた議論として読解されていたといえる。

しかし、学科の成立のために形式社会学が主流となりえたからといって、社交性という概念が無批判に使用されていたわけではない。むしろ強烈な批判を受けている。シュミットの『政治的ロマン主義』(初版一九一九年、第二版一九二五年)による社交性への批判である。野口雅弘は

「社交的ロマン主義者」が差異を尊重しその場の誰かが排除されることも独白が始まることもない点に、「ある種のデモクラシーの理念」をみているが、決断なく何も決めることもない冗長な会話をシュミットの政治的ロマン主義批判のポイントとしている。「孤独を厭って陽気な会話の浮動性のなかでただよっていたいという欲求の上には社会的秩序は築かれない」のである(Schmitt, 1925 = 二〇一二: 一九五)。これに対比されるかたちで、選択肢を立て一つを決断し他を断念することが評価されるのである。「シュミットの『政治的なもの』の概念がジンメルの「社交」の理論を凌駕していく」のだ(野口、二〇一六: 一〇、註野口、二〇一二: 二五六、二六五)。

シュミットによる社交性への痛烈な批判にたいする正面からの反論を試みても、それは相互に相互を前提とする対立へと陥るだろう。このシュミットの批判が本稿にとって示唆的なのは——野口がその意図が異なるにしても指摘しているように——ここでシュミットがジンメルを名指して批判していないという点にある。シュミットはあくまで社交的なロマン主義者を批判したのである。だとすると、シュミットの批判する政治的ロマン主義の文脈における社交性概念とジンメルの社交性論とは必ずしも一致しないという仮説を立てながら、ジンメルの社交性論の継承を読む必要が出てくる。では一九二〇年代に形式社会学がドイツ社会

学界のなかで優位となっていくなかで、ジンメル（Gemeinschaft）の社交性論はどのように読み継がれたのだろうか。

二 接近概念としての「社交性」と距離としてのジンメル（Gemeinschaft）の社交性

ヴィーゼは、ジンメル（Gemeinschaft）の形式社会学を展開するために社交性概念を用い、それに近い「結合（Gesamtheit）」に自らの関係学を展開する際の重要な位置を与えている。結合は、分離状態の解消の意味で用いられ、社交性は「孤独（Isoliertheit）」の対概念として登場する（Wiese, 1924: 76）。

しかしヴィーゼは『一般社会学』（一九二四）のなかでジンメル（Gemeinschaft）の「社交性の社会学」にほとんど言及しない。一か所だけ、結合に対する「分離—無関係」が主題となる第六章二節「距離（二度目）」への註において言及されている（同：207）。ヴィーゼは、R. パークとE. パーセスによる『科学としての社会学入門』（一九二二）での人種関係の議論とそこでの「社会的距離」の概念を参照し、距離という概念が人間関係の大部分を規定していることを強調する。

そして距離に基づく関係の事例としてヴィーゼは、「良き集まり（gute Gesellschaft）」の社交的関係を提示する。社交的関係はサロンにおけるやり取りとして扱われる。サロンで正しく振舞える人というのは、「上下の境界に一瞬

たりとも気を緩めることなく、相互に同時に接近しつつ離れる上下の動きに対する正しい直感（Instinkt）」をもち、その直感を作動させている人」である（同：179）。

この節全体にたいしてジンメル（Gemeinschaft）の社交性論への参照を指示していることから、まさにこの「良き集まり」からサロンの議論までの箇所がジンメル（Gemeinschaft）の社交性論を直接参照している箇所だと推測できる。ヴィーゼは、結合や社交性を自らの形式社会学で接近の契機として重視しながらも、ジンメル（Gemeinschaft）の社交性論は、むしろそれとは反対の「距離」の議論において参照される。ジンメル（Gemeinschaft）の社交性論は、距離がいかに社会関係において重要な契機なのかを示すために用いられているのだ。

フィーアカントもまた『社会学説（Gesellschaftslehre）』の初版（一九二三）の第二部「人間に備わる社会的なもの」において「社交性への傾向」という節を書いている。フィーアカントが論じる社会学は、ゲゼルシャフトにたいする「ゲマインシャフトの優位」として特徴づけられる。つまりいかなるゲゼルシャフトであったとしても、ゲマインシャフト関係は前提とされるというのだ（cf. 中、一九七七）。社交性への傾向も議論の型としては同型だ。つまり社交性への傾向は「その最終的な形式」としては、純粹な目的団体として考察され、ゲマインシャフトに対立するものだと思われることになる。それでもフィーアカントは、社交性への

傾向を基本的にはゲマインシャフトの関係として考察しており、社交性が意味するのは、ヴィーゼと同じく人間関係における接近の契機である。たとえば社交性は「暖かさ」とされたり、その対立概念が「回避」とされているところにこうした点が見受けられよう (Vieckandt, 1923: 162-3)。

しかし「社交性への傾向」の節ではジンメルは社交性論への言及はない。それが登場するのは、三章「ゲゼルシャフトの根本関係」の「ゲゼルシャフトとその個々の形式」においてである。この箇所では、法や道徳のように個々人にたいして相対的に独立して存する「外的形式」としての社交性の形式がとりあげられており、この外的形式が人間の内的形式としてのゲマインシャフトないしはゲゼルシャフトを形成するとされる。社交性の外的形式がゲマインシャフトを形成する場合には、低級な文化段階や村落でみられる「全体形成の意識やそこに結びついた快適な感情や故郷の感情という意識」が生じる。雑談や歌唱、ダンスといったものが人びとの意識を結び付ける。これにたいして、『ゲゼルシャフト』における交流、つまりはサロンの集まりはまったく異なる特性をもたらず。そこでの「その基調となっているのは、距離とエチケットの支配である。つまり私たちがとりわけ関与しているのは承認関係である」 (Vieckandt, 1923: 239-40)。

フィーアカントがこれに一致しているとするのが、フェ

ルディナント・テンニースによる「協約的な社交性」である。つまりどんなに互いを尊敬しているように礼儀正しく振舞っていてもそこにいる人びとは互いに「自己の重要性和優越性を浮き立たせよう」としている。結果として社交性におけるやり取りは支払いにたいする返礼のようになり「社交性は言葉および好意の交換」となるのだ (Tönnies, [1935]2019 = 一九七九・上一一五)。これにたいしてジンメルは社交性はまったく異なるとされる。ジンメルは社交性論は、個人の重要性や優越性ではなく、「相互的な結びつきそのものを社交性の核心」にみている。

サロンの社交性は、礼節 (Takt) (配慮 (Rücksichtnahme))、親切 (Entgegenkommen) の掟のもとに、そして相互に生活をより美しくより豊かに形成しようとする一般的な意志のもとに成立する——たしかに一切は仮象の世界にあるに過ぎないのではあるが。 (Vieckandt, 1923: 240)

この仮象、みせかけの性質にジンメルは遊戯性をみる。遊戯的だとされるのは、「現実世界のなかではまったく異なる心情が支配的である」が故である。ジンメルの社交性に重要なのは「遊びのゲマインシャフト (Spielgemeinschaft)」なのだ。フィーアカントがゲゼルシャ

フトとしての外的形式である社交性を論じていることを踏まえ、**「遊びのゲームインシャフト」**という表現にはゲームインシャフトそのものではないということが仄めかされている。

こうした二つの社交性論にたいしてフィーアカントは、現実社会の実態に照らしてテンニースの方に軍配を上げる。ジンメルという社交的な関係は「今日の社会においては支配的ではない」。こうした社交性が存在したのは、かつてのアンシャンレージュの時代であり、ここでは社交性は遊戯以上の意味をもっていた。つまり遊戯として現実には無関係なのではなく、現実の闘争のために社交性は探究されてもいたのだ。

以上、ヴィーゼとフィーアカントというジンメルの形式社会学を継承した二人の社交性概念とジンメルの社交性論の扱いを検討した。まず両者の議論のなかではともに、社交性概念とジンメルが提示した社交性論とが別物として論じられている。社交性概念自体は人間関係における接近を示すものだが、ジンメルのそれは距離を示すものなのだ。ただしそのニュアンスは両者で一致しているわけではない。ヴィーゼにおいてこの距離は、社会的距離として集団同士の関係を検討する際のものであればサロン集まりを享受する際に守られるべきとされているものだ。これにたいしてフィーアカントの扱う距離は、ヴィーゼの意

味での距離のニュアンスのみならず、現実からの距離なのである。ここで距離がとられている「現実」に込められた意味はいくつかある。まずテンニースの社交性の記述が示す通り、「自己の重要性和優越性」を示す目的に仕える社交性が現実である、また「生活をより美しく豊かに形成する」という点で美ではないものが現実である。さらには一九二三年時点でジンメルの社交性が過去の遺物となりリアリティを失っているという意味での現実だともいえる。フィーアカントはジンメルの社交性論を、一九一九年の書評の時点では社会学の学科性、つまりは非教義的性格、非イデオロギー性を示すものとして評価していた。しかし、一九二三年になると社交性はその事例の面で古いとされるのである。さらに、フィーアカントがジンメルの社交性論に言及していた箇所は、一九二八年に出版された「全編改訂第二版」においては削除され、テンニースの「協約的な社交性」の議論しか扱われていない (cf. Vierkant, 1928: 269-70)。この削除の意味は小さくはないだろう。ジンメルが使用する意味での社交性は現実的な意味をもたなくなっていくのだ。

先にみた、政治的言説から距離をとるジンメルの社交性論と『政治的ロマン主義』における批判の対象としての社交性とを踏まえると、公共性から距離を取るものとして評価されていたジンメルの社交性論は、結合や接近を示す形

式社会学の基礎概念の位置をしめる社交性概念の議論とはまた別に、社交的な現象として現実性との関連のなかで問われることになったといえる。ウィーゼの距離概念への言及が、人種関係における距離やサロンを成立させるマナーのレベルで問われていたこと、そしてフィーアカントの論じた、現実にはそぐわないものとしてのジンメル¹の社交性論といったものは後者にあたる。そして、そうした現実性のなかでジンメル²の社交性論が吟味されるとき、シュミットの批判とフィーアカントが抱いていたサロンの社交への距離感とは大きく異なるものではない。つまりシュミットが何ら決断をしない社交的な歓談を批判するのも、フィーアカントがジンメル³の社交性論を遊戯でしかないもの、古いもの、美的なもの⁴とみなすのも、ジンメル⁵の論じた社交性は仮象に過ぎず現実的な意義をもたないという点で一致している。憲法学者として社会学を批判的にみる⁶ことが比較的に容易なシュミットのみならず、社会学を学科として自律させようとするフィーアカントからもジンメル⁷の社交性論は批判的に読まれざるを得なかった。いわば一九二〇年代にはジンメル⁸の社交性概念が消されていくようにみえるのだ。

しかし一九二〇年代において、ジンメル⁹の論じる社交性は決して社交性概念とジンメル¹⁰の社交性論として分裂したまま後者が駆逐されたわけではなかった。オトマール・シュ

パンは、ジンメル¹¹の社交性論を批判的に継承し、自身の普遍主義社会学の鍵概念である「^{そごうかん}雙関」として示している。

三 シュパンの普遍主義社会学と精神的共同性としての社交性

オトマール・シュパンは、一九二〇年代の社会学界に影響をもち、個人の实在性を出発点とした個人主義社会学を批判する、全体性を出発点とした普遍主義社会学を構想するなかで社交性を論じている。今ではほとんどその名前を聞くことはないだろうが、彼は一九二〇年代の社会学界隈において大きな影響力をもっており、その反自由主義・反民主主義的主張から国家社会主義への道を開いたともされている⁽¹⁾（忽那、一九九二・二九六・七、秋元、一九八一・一〇・二二）。彼が意図していたのは、テンニースやヴェーバーの社会学論が含む、自然主義的で個人主義的な発想を批判し、普遍主義社会学を打ち立てることだ。個々人が自然にもっている利害関心から社会を説明し「社会は諸個人の寄与にもとづく発展のなかで初めて成立する」とする議論が批判される。シュパンはそうした個人を包含し個人以前にある「全体性としての社会」から始まる社会学論を構想した。

忽那敬三はシュパンの社会学論の構図を、二つの点から

整理している。第一に、個人はあくまで「他者のなかに在ることによる自己存在」として把握されねばならない。はじめに自律した主体性がありそれが他者とかかわるのではなく、主体性が確保されるために他者が欠かせないのだ。両者は相關関係にある。社会における個人のこの相關関係が、「精神の共同性」である「雙関（*Gesamtheit*）」だとされる。雙関の典型的な諸形式としてシュパンが挙げるのは、友情、愛情、社交性、家族、教師と学生との関係である。第二に、そうした相關関係はそれ自体で成立しているわけではない。自己と他者のかかわりあいには、「個人の超個人的な背景」の存在を前提としている。こうした背景にその都度の個々人の個性が入り込むことは否定されているわけではないが、この背景は各個人を超えるのみならず一切の個人を拘束する「より基底的な背景」、「根源的な枠組みとしての共同世界」、「全体世界」である（同・二九八・三〇五）。この全体世界がシュパンにとつての「社会」である。社会は諸個人が生み出すものではなく、所与のものなのだ。かといってこの世界は各人の個性を消去するものでもない。全体世界は、個性性を完全に捨象する物質的世界だと想定されておらず、あくまで個人にとつての精神的な背景である。この全体性が近代の物質的な支配による社会にたいして「精神の共同性」だとされている。こうした共同性の理念を具体的に実現する像が、中世の身

分制社会なのだ。いずれにせよ、個人よりも社会が優位に置かれるのは前提とされており、「社会という全体はそれ自身を分枝させ、その分枝は全体の側から理解されなければならない」のだ（Mozetic, 2018 ≡ 二〇二一・一八七）。

シュパンは社交性を雙関の典型的な形式として示しており、先に示した辞典が参照しているのも、この「社交性」を説明する箇所である。シュパンは、「愛・社交性」という節の最後に、註を付けてここでジンメル「社交性の社会学」へのコメントを記している。社交性という「精神的なゲマインシャフト関係」を「ひそかに個人主義的に観察する方法」としてジンメル「社交性論」が挙げられているのだ。シュパンはジンメル「社交性論」を「全くもって不適切な分析」だとしている。シュパンが批判するのは、ジンメル「社交性論」が社交性を生活の根源性から切り離して、芸術との類比で考えられる無目的なものとした点、すなわち「表層性」にある。そしてこの表層性批判は、ジンメルその人の性格にまで及んでいる。「こうした表層性はまさにあの表層的な人間のものである」と。たいしてシュパンの描く社交性は「精神的な糧の源泉と源流」、「精神的なゲマインシャフトと目的追求という現実的で自然発生的な領域」だ。シュパンが提示する正当な社交性が描かれているのはプラトンの『饗宴』、『パイドロス』であり、ノヴァーリスの『青い花』や『ザイスの弟子たち』なのだ。社交性は、「経済、

家族、政治、芸術といった現実的な生活諸内容」から切り離されるのではなく、それらを「担っている」。ジンメルがアンシャンレژیームを「子どもの戯事」とみなすのになんていって、シュパンはまさに生活と切り離されていない点をアンシャンレژیームの社交性に見出している。社交性が形骸化しているのではなくて、「生活そのものが格式張っている」のだ (Spann, 1923: 95)。

ではシュパンが用いる「社交性」は何を示すものだったのか。それは、個々人には還元されない客体性をもちながら、個々の心情を変化させ形成していくものであり、エゴイステイックな個人とは無関係にあるものである。社交性は、たしかに盛り場のように、個々人が互いに楽しみ合うところにあるのではあるが、個人の楽しみには還元されない。社交性の本質は、対抗する諸力を「内的に編み換える (innere Umbildung)」ことなのだ。ここでの編み換えとは、個々人の心情の変化である。変化をもたらすのは「集まりの空間」のなかで感じ取られる、一切の個々人を貫く網を生み出す多数の結合であり、シュパンはこれを「内的諸力」と呼んでいる。内的諸力には二つの作用がある。ひとつは、そこにいる人たちの心情を変化させる。集まりにいる人は、この力によって精神の高揚を感じることもある。ふたつは結合性であり、個々人の心情の変化のみならず、心情そのもの

を形成する、創造的な作用を意味している。シュパンはここで友情がこうした結合性を支えるとしている。友情という言葉が出てくるように、社交性においては、名誉欲や競争が引き起こす出来事は考慮されていない。そして社交性が客体として成立するとき、個々人がそれを生み出すのではなく、社交性における客体的なものが「新たな特性、新たな目的、新たな意志を私たちのなかに生き生きと生み出すことで、私たちをつくる」のである (Spann, 1923: 93-95)。

こうしたシュパンによる社交性の理解は、ヴィーゼやフーリアカントと異なる。すなわち、社交性概念とジンメルの社交性概念とを別物と考えるのでも、素朴に現実に適さない古いものとするのでもない。この意味では先の、概念としての社交性と現実性のレベルで問われる社交現象という区別はシュパンの社交性理解には適用しがたい。シュパンは、社交性をたんなる図式上の一概念として捉えるのではなく、社交性を接近と距離とのどちらも含んだ雙関として扱い、個々人の変容をもたらす現実を形成する力を社交性に認めている。すなわち、雙関が精神の共同世界を前提しながら枝分かれしていることを示しているために、個々人のあいだには互いに互いを前提としているという点で距離もあれば、両者は精神の共同世界でつながっているという点で接近している。さらに概念上の結合や分離

を示すのではなく、個人に先立つものから関係が形成される点に注目している。個々人を変容させたり、新たな結合を形成したりする力が社交性には認められているのだ。そして、シュパンによる社交性は、フーアカントが過去の遺物としたジンメルの社交性の、まさにその古さを逆手に取っているともいえる。つまりジンメルは社交性論の古さは、シュパンにとっては個人主義的な世界観とは異なるリアリティをはっきりと示すものとなる。

シュパンの論じる社交性が示すのは、現実での対立以前に精神の共同世界を設定することによって対立を避けるというものだった。まさに個人主義社会学を批判したシュパンにとっては、社交性もエゴイズティックなものではありえず、精神の共同性に依拠した確固たるものでもあった。シュパンは、シュミットが先にみたように社交性を「持続的結びつきの基盤ではない」し、社交性のうえに「社会的秩序は築かれない」とするのは正反対に社交性を、社会を構成する根本的な契機とみなしている。それは結果的に、シュパンの議論が、フーアカントがジンメルは社交性概念を肯定的にも否定的にも現実から距離をとるものとして、シュミットの批判と結果的に重なるのにたいしても対立することになる。とはいえシュパンはこうした社交性を論じること自身で普遍主義社会学を語っていたのだから、シュパンの議論もまた社会学の基礎づけにかかわるも

のでもあった。

では、シュパンはジンメルは社交性論とどの点で袂を分かつのだろうか。それは先に示しておいた、生活の表層でしかないものなのか生活の根源に棹差すものなのかという点である。シュパンの表層性批判は、ジンメルその人のこととまで及ぶのを示した通りである。社交性論は、生活の根源に結びつき、だからこそ個々人の以前にある精神的な全体世界との結びつきを得られるのである。シュパンは、ヴィーゼやフーアカントによる概念としての社交性と現実性の層にあるジンメルは社交性論という区別ではなく、社交性の表層性と根源性という区別を用いて、ジンメルは社交性論を批判している。

四 「社交性」という言葉の振幅と基層性をしめす「影の形象」

これまでのジンメルは社交性論受容からジンメルは議論へと回帰するとき、まず指摘すべきは、「社交性」という言葉の広がりであろう。ジンメルが形式社会学の一例として示した「社交性」は、その受容からみて一方では、非常に抽象化されたかたちで社会関係における結合的契機そのものを示す。他方では、たしかに社会の担い手として根本的な次元を示しはするのだが、ヴィーゼやフーアカント

とは別のかたちで抽象化された精神の共同体へと、そしてシュパンが指摘するようなプラトンやノヴァーリスといった人びとの議論へと接続される言葉であった。これらは、ジンメル（Zimmmer）の社交性論そのものの、そして社会学史上での社交性という言葉そのものの解釈の幅を物語っている。

最後にこの二つの論点からみえてくる、ジンメル（Zimmmer）社交性論が一九二〇年代にかけて読解されていくなかで、社会学の制度化という学史的状況とジンメル（Zimmmer）の社交性論とを交差させる視座をとるときに、既存のジンメル（Zimmmer）社交性論研究との差異や新たに論点としてとりあげられる点を指摘し若干のコメントを加える。

第一に検討すべき論点は、ヴィーゼやフーアカントが区別として導入していた、時代の社交現象と社交性という概念をジンメルがどのように捉えていたのかである。ジンメル自身は「社交性の社会学」や『社会学の根本問題』第三章において、近代社会のなかでの社交現象について直接的には多くを語っていない。ジンメル（Zimmmer）の社交性論が社交サロンと結びつきが深いことが指摘されていたりヴィーゼやフーアカントがサロンという用語を使用していたりした点についてはすでに述べてある。しかし実のところジンメルは少なくとも社交性論のなかでは、「サロン」という用語を一度も使っていないのであり、社交現象と近代社会との連続性を明確には語っていない。むしろ社交性論以

外の記述をみると実際のな目的を入れ込まない社交的集まりの不可能性の方を意識していたともいえる。一九一三年の講義ノート「近代文化と倫理の問題」のなかの「義務の葛藤」の一節において、近代の団体はすべからず目的団体だとされる。目的団体とは、客観的な目的を達成するために「人格全体を排除し部分的にのみ個人がかかわる」団体である。そして、「社交生活もまた目的団体と同じ性格をもっている」(Simmel, [1913]2010: 386)。¹³⁾

第二の論点は、ジンメル（Zimmmer）の使用する社交性が孕む基層性である。これはヴィーゼやフーアカントにおいては社交性概念そのものの、シュパンにとつては社会の根本的な担い手とされていたものだ。ジンメルが考察していた社交性をもつ基盤的性格は、既存の研究では、社会形成の楽しみそのものだとしてきた「社交性衝動」や芸術や遊戯の世界が自立するのと同じく社会の自立したものとなる「軸の転回」の議論として扱われてきた。しかし、とりわけシュパンの議論との対比から検討すると、ジンメル（Zimmmer）の指摘する社交性の基盤を示すためには「形象」という言葉の方が適切にも思われる。このことを以下描き出してみよう。まずジンメルが提示している社交性衝動は、たしかにヴィーゼやフーアカントが示すように人間の根本的性格を指摘している。しかしその言及箇所周辺からはもう少し複雑なニュアンスが読み取れる。社交性衝動とは、集まりそのものを

形成することに含まれる楽しみのかたちである。言い換えるなら、これは相互作用の目的として結晶化している個々の利害関心やそのための集団の形式から、人が集まっている形式そのもの、その過程の形式を、その他の形式と区別された意味あるものとして抽出する力である。ただしそれはたんなる一過性の感情や力ではなく、芸術や遊戯のもつ特別な「形象 (Gebilde)」と等しく一般的なものでもある。遊戯や芸術は、その内実の多様性にもかかわらず、芸術一般、遊戯一般という一般的なものを含んでいる。この一般的なものが特別な形象であり、この形象は「形成された諸現実から形式を摘出し、現実を自らの背後にとどめておく」。ただしジンメルはこの「一般的なもの」の形象が個人から離れて実体をもったものとしては捉えていない。つまり遊戯や芸術へと向かう感情こそが、それぞれに遊戯や芸術といった限定をもちながら「一般的なもの」とされる (Simmel, [1911]2001: 178)。そしてそうした感情の動きを捉えることのできる形式の実体性を指摘している。ジンメルは社交性の実体性を、「身体 (Körper)」、「世界 (Welt)」、「王国 (Reich)」といった言葉で形容している。社交性は「その身体 (Körper) をうちたてる」のだ (同: 177 強調原著)。

では「一般性」を孕む「形象」が個々人に還元されないとする、シュパンのように「精神の共同性」の議論にまで向かうのだろうか。シュパンの社交性論からは、社交性

が個々人に還元できないリアリティの形成力を持ち、「内的諸力」として作用するという点でジンメルの社交性論との連続性を指摘できるのだ。シュパンはこうした社交性をもつ力を精神的共同体へと接続させる。シュパンは、その手前に何かしらの確固たる全体性を確保して社交性を考えていた。ではジンメルはそれをどのように表現しているだろうか。ジンメルはこれを所与の層で確保するのではなく、何らかの構成体の層で確保しようとしていると思われる。社交性が影にあるという点だ。社交性衝動や社交の足場を構成する形象は、あらかじめ存在するのではない。ヴィーゼ、フーアカント、シュパンはその論じ方に差異はあれど、社交性を個々人に先立つものとしている。しかしジンメルは、社交性を「形象」として提示しつつも、それに「影」や「象徴」といった言葉を重ねている。既存の研究では、「影」や「象徴」は社会の理念というかたちで捉えられてきた。しかし、ジンメルが、これらの影や象徴を、すでに造形されている芸術作品との重なり合いのなかでみているとすると、たしかに理念ではあるかもしれないが、それは所与のものではなく個々の集まりのなかでしか出来ないものとも読めるかもしれない。社交性は個々の具象的な集まり無しには成立しないのだが、その場の個々人へとも還元することもできない構成体 (Gebilde) としての「影」をとまなう「形象」なのだ (同: 179)。

これらの論点をまとめると「近代社会とは直接には接続されない、個々の感情をそのなかに包含しながら基層性を示す影の形象」となる。この論点はジンメル社交性論の読解と学史的状況の重なりの中から抽出されるものであった。だとすれば、この観点からジンメルの社交性論全体を論じなすとき、社会学史や学説史、概念史上でのジンメル社交性論の位置とジンメル社交性論の読解とを現在よりもずっと実りあるかたちで論じられるかもしれない。これらの観点がジンメルと直接時代を共有していた世代との比較検討から生じてきたことの意味は小さくないだろう。それはジンメルが社交性論に託していたものを掠めているかもしれない。

註

(1) この距離は、個人がわきまえる節度や秘匿性、個人が個別性を確保するための「距離」であり(北川、一九九〇・一四五)、そこでは「他者の内面に介入せずそっとしておいてくれる、あるいは他者の存在を距離をもって容認してくれる」態度(廳、二〇一五・四五・六)が求められる。さらにこれは一定の距離のなかに人びとを入れ込むという意味での距離でもあり、社交的な集まりでは人びとのあいだの仮初の「対等な関係」がもたらされる(作田、一九八〇・五〇、村上、一九八六・三八〇、岡澤、二〇一五・九五・六)。それでも対等な関係での会話は

決して表層的な人間関係にとどまらず、「親密性の変形」でもある(廳、二〇〇八・一七)。ここで「変形」とされるのは、特定の他者の内面・心情の理解ではなくあくまで語られていることの理解だからだ。社交性の具体像は「語らい」であり、「談話を通しての相互的な解釈過程そのものの享受」が行われる(廳、二〇〇五・六五)。早川洋行は社交性の成立のために「自己と他者とのシンパシーを承認」することが不可欠であり、「お互いの感情を理解しあう、すなわち共感・同感する存在」という前提があるとしている(早川、二〇二〇・一一二)。たいして北川東子は社会学的な理解と歴史的理解を区別する。前者は悟性的理解であり、大都市のような空間に支配的なもの、「最も感情のこもらない」「人格の深みからもっとも遠い」ものだ。悟性的理解は、歴史的理解のあり方に優越する(Simmel, [1903]1995: 117 = 一九九九・一七六、北川、一九八六・一三三)。とはいえ北川もまた社交性論のなかに近代の大衆性とは相いれない「ロマン主義的エッセー的スタイル」を読み取つてもいる(北川、一九九七・二四四)。いづれにせよ「親密性」を含んだこうした他者との遠近が設定されるなかで、社交性とは「社会関係のプロセスそれ自体を(味わう)、それらを(楽しむ)感受能力が醸成される関係のあり方」であり(菅野、一九九八・三九)、その本質は「他者への繊細な配慮性とそれにもとづいて関係そのものを味わおうとする態度」にある(菅野、二〇〇三・二二八・三〇)。こうした解釈で示されるように社交性には理念的な社会性が示される。社交性による現実からの距離は、他の社会諸形式からは区別されつつその一切に潜在する社交性の世界が成立することを示す。そ

(2)

してその世界は人間社会の本質を開示する理念である。社交性は宮廷やサロンが示している実体的な社交空間に限定されず、「社会形成そのものを樂しむ感情」をともしなう社会的相互作用の形式（菅野、一九九六・三八）、諸個人のあいだで「流動する力の形式」（松本、二〇〇九・一二一）、「他の社会活動の派生物ではなく、社会そのものを形成する根源的な作用」（山崎、二〇〇六・五一）である。それゆえあらゆる社会的相互作用には社交性が「契機としては存在する」（菅野、一九九六・三九）。そしてこうした形式化が達成されるために必要なのが「軸の転回」であり、これによって芸術の世界や宗教の世界と同じように社交世界が形成される（居安、二〇〇〇・一二一・三二）。とはいえそれは理念にとどまるもので現実化されるものではない。ジンメルは「影の国の遊戯性」をしめす理念像と理念像からして、社交性は「影の国の遊戯性」をしめす理念像であり（廳、二〇一〇・六六）、社会を成立させる具体的契機を欠く「社会の零度」だ（芦川、二〇〇三・一八六）。あくまで社交性が有益なのは、「現実を相対化するための統制的理念の一種」として、である（廳、二〇一〇・六六）。

美的・感性的なニュアンスにおいては分裂にたいする一致や調和が指摘される。社交性もつ非現実的性格が、芸術とともに語られることで「生の本質と多様性を象徴的に暗示する」ものとなり、「現実にはありえない遊戯空間であるがゆえの理念的調和」が示される（廳、一九九五・五五八）。こゝでの調和とは、近代において分裂した個人と社会、自然と文化との調和・一致の理念を部分的に示すことだ。つまり社交性が「かろうじて具体的に示されるまゝとまり（Einheit）を象徴的なやり方で把

(3)

握可能にする」ことを示している（Lichtblau, 1996: 201-2）。ただしそうした調和の示し方はあくまで象徴的なものであり、そうした空間が完全に現実の真剣さから離れてしまつてはならない。ここにエロティックなものを仄めかしあうコケットリーや芸術といったものが重ねられる。ジンメルは、シラーが芸術の自律した世界を美的国家として構想したように、美的な世界と現実世界との区別を保持している。ジンメルはこの区別のうえで、両者をアナロジイというかたちで接続させる。つまり、社交現象における現実との遊戯的な交際が実現するなかに、無目的である純粋な芸術のアナロジイが発見される（Lichtblau 2009: 16）。そしてこうした調和の構想はジンメルは美学の一構想が投影されたものでもある。ジンメルは美学のうちには、水差しの把手が実用性としての価値と美的な価値とが対立するのではなく宥和している調和の美があるとされる。そしてこれが社会へと投影されたもののひとつが社交性である（早川、二〇〇三・一二六・四八）。

社交性概念は、アリストテレスが規定した人間の社会的性格（社会的動物としての人間）に由来し、カントやシュライアマハーによって、社会倫理・美といったものとの結びつきではなく、哲学的概念へと彫琢されていった。とりわけシュライアマハーは社交的な会話についての理論をうちたて、「合理性志向の傾向とロマン主義の傾向との連続性」が指摘されている（Hinrichs, 1974: 157-8）。また櫻井佳樹は、エリアスに依拠しながら西洋社会のマナーの歴史をたどり文明化の過程と自己の規律化の過程をたどるなかで、マナーが規律化に還元されない議論として社交性を捉え、シュライアマハーとジンメルは社交性論に言及

している。マナーの問題を社交性の問題として捉えたと「社会におけるマナー問題の布置とその歴史的な構造変化の一端を明らかにできる」として、現代社会のマナー問題を「匿名性、流動性、個人性、美意識」だとしている。櫻井がジンメルの社交性論と貨幣の機能を論じているところから、ここでの現代は近代以降のわれわれが生きている社会と言い換えてよからう（櫻井、二〇一四・五〇・六〇）。その他のものとして、北川、一九八七、廳、二〇一〇・六二、Jung, 2016: 86、Albrecht, 2018、Rammstedt, 2020を参照。

(4) たとえばエマヌエル・ベーターによれば、社交性概念は、ブルクハルトにおいては高度な文化の相關物であったために、文化の低落とともに社交性も衰えると考えられていた。こうした凋落の流れとは切り離して社交性を捉える端緒となったのが、西洋の社交性の歴史を振り返ったルスヴルムであり、テンニースの『ゲマインシャフトとゼゼルシャフト』であった。ジンメルは社交性を歴史観とは明確に切り離し、テンニースによるゲマインシャフトとゼゼルシャフトという二分法では捉えられない領域を社交性から捉えようとした（Peter, 1999）。また Gehring, 1969、Köhnke, 1986ではモリーッツ・ラザルス（一八二四・一九〇三）「アルベルト・シェフレ（一八三二・一九〇三）」とこの名前が挙がることもある（Gehring, 1969、Köhnke, 1986）。

(5) ただしアルブレヒトが引き合いに出すプレスナーの『ゲマインシャフトの境界』においては、ジンメルへの言及はない（cf. Schneider, 2010）。この他に社交性の構想を展開するものとして、E・フロムを始めとしたフランクフルト学派への展開（出口、二〇〇九）、アメリカの社会心理学を中心とした小集団論

への展開（Levine, 1976: 1117）、アメリカ社会に即した展開やゴフマンの儀礼論への展開（Jaworski, 1997: 3 ff., 29 ff.）、D・リースマンの他人指向型との類似がある（伊藤、一九九二）。

(6) 社会学史と社交性論とをジンメルの社会学思想の生の哲学的展開のなかで検討するものとしては廳（二〇〇〇・二六・二〇〇一・二二・五）を参照。ノルベルト・アインシュタインは『日常』（一九一九）において、社交性を社会全体を見渡すための典型としてみるかたちでジンメルの社交性を受け継いでいるとしている。

(7) ここでの人物のビックアップは、おもに社交性をめぐる社会学辞典および概念史辞典に依拠している。まず一九二〇年代において形式社会学の系譜におけるジンメル社交性論の扱いをみるために、ジンメルの形式社会学を関係学へと展開し、一九五九年には第一回社会学者大会を回顧する講演を「社交性」と題して行っているヴィーゼ、そしてヴィーゼとともに語られることの多い、フィーアカントをとりあげる。また「社交性（Geselligkeit）」の項目をみると、そのほとんどがI・カントやF・シュライアマハーといったドイツ観念論の哲学者の名前を挙げ、社会学での議論はジンメルに限られていることが多い（cf. Hinrichs, 1974、Göttert, 1996、Albrecht, 2006、Rammstedt, 2020）。ただし「社交性」の項目において、ジンメル以外の社会学者が参照されないわけではない。先のフィーアカントおよびオーストリアで一九二〇年代に、個人主義にたいする普遍主義社会学を提唱したシュパンへの参照指示がある（Eisler, 1927、Bülow, 1969）。ただしドルフ・アイスラーは、「社交性」の項目を立てつつも、「社会（Gesellschaft）を参照のこと」として

文献参照を記すのみである。挙げられている文献とその頁数は、「カント」判断力批判」四一節、ジンメル「社交性の社会学」『第一次社会学大会議事録』一九頁以下、シュパン「社会学説」九五頁、フィアカント「社会学説」一六二頁以下」となっている (Eisler, 1927: 528)。ただしジンメルの論稿が始まるのは一頁からであり、一九頁は存在しない。

- (8) 八つの書評は以下の通りである (M., 1918; Schmid, 1918: D., 1919; N.N., 1919; Troeltsch, [1919]2010; Vierkandt, 1919; Sickel, 1920; Wurm, 1920)。

- (9) ひとまずジンメルが社交性論を論じた第一回ドイツ社会学者大会でトレルチが報告した「ストア的・キリスト教的自然法と近代的世俗的自然法」のなかでトレルチは自然法則と理念法則とをわける。自然法則は、自然科学の法則のように現実のなかで人間の意志に関係なく妥当する法則であり、理念法則は自然法則に還元されない、人間が現実に応答するときの法則といえる。社交性の議論は、「自然の形式法則」とされるので、自然法則に該当するのが社交性の議論ということになる (Troeltsch, [1911]2014: 7234 = 一九八一: 11139)。

- (10) ジンメルの社交性論は彼の自宅で催された社交サロンの経験から書かれたとされ、さらにはジンメルは一九〇年代から始められた画家のザビーネ・レプシウス (一八六四 - 一九四二) のサロンに出入りし、ズスマンをはじめ、ルー・ザロメ、シュテファン・ゲオルゲ、ヴィルヘルム・ディルタイといった人びとと交流をもった (Susman, 1958: 281, Wilhelmy-Dollinger, 2000 = 二〇〇三: 四九七)。

- (11) 岩崎卯一は一九二四年の冬にウィーンを訪れ、シュパンに直接

面会しおり、ドイツ語圏社会学界の近況やジンメル社会学、英米圏の社会学、ユダヤ人について歓談した記録を残している。もちろん録音を文字に起こしたのではなく面会の記憶を頼りに日記的に記されたものではあるが、彼の生の声を伝える貴重な資料であることに変わりはない。シュパンが当代一流の社会思想家であったこともこのなかに書かれている。シュパン曰く、ジンメルの著作のなかで進んで読もうと思うのは、『貨幣の哲学』でも、『社会学』でも、『カント』、『ショーペンハウアーとニーチェ』、『生の直観』でもない。読むに値するのは、『彼が美学を論じた「哲学的文化」と、それに北欧の画聖レンブラントを借りて芸術哲学を論じた「レンブラント——芸術哲学の試み」です。でも、こんな著述は、ジムメルの社会学を研究する人たちには、あまり用のないものばかりでしょう』(岩崎、一九二六: 五〇八)。なお一九四九年に出版された同著者による『社会学の人と文献』にはこれらの記載はない。

- (12) 「人間の精神の本質は安らかな存在ではなく「安らう」とはすでに「それ自体に基づいていること」の誤りの第一の前提である」、他なる精神によって振り立てられている、喚起されている、絶え間ない流れのなかで常に生成するものなのだ。喚起させられた存在と喚起の作用は精神的なゲマインシャフトの本質を形成している。すなわち、私たちが雙関と呼びたいと思っていることの本质を、である」(Spann, 1923: 89)。

- (13) アドルフ・レーヴェのテキストについては「レーヴェによるこの基礎をなしている講義ノートはおそらく、講義に直接なラって、そのまま転記された講義ノートを含んでいる」とされている (Simmet, [1913]2010: 1086)。

- (14) 松本(二〇〇九)はこの点を一九一七年版で追加された「軸の転回」論によるものとみている(cfr. Simmel, [1917]1999: 105 = 二〇〇四・六二)。また社交性論における「礼節」をリズムという感性的なもので捉えるものとして田村(二〇二二a)を参照。
- (15) ここでの「形象」をめぐる議論は一見すると「軸の転回」の議論に重なるように思われよう。しかし、今後も検討が必要な点ではあるが、「軸の転回」の既存の解釈では本来的には手段であったものの目的への転化という側面が強調されてきたように思われる。それゆえにおそらく議論としては酷似しているながらその内実においては同一とまでは言えない、「貨幣の哲学」における貨幣という純粹な手段的性格をもつものが絶対的目的へと転化するという議論と社交性論との類似性が指摘されることになる。本稿で「形象」を強調するのは、ジンメルが社交性を個々の人格性にもとづくものとしている点が、一九一七年版に追記される「軸の転回」よりも一九二二年版で「社交性の身体」という表現で使用される方が捉えやすいためでもある。

文献

- 秋元律郎、一九八一、「一九三〇年代のドイツ社会学」『社会学史研究』三：一・一六。
- Albrecht, Clemens, 2006, „Geselligkeit“, Hg. von Friedrich Jaeger, *Enzyklopädie der Neuzeit* 4, Stuttgart: J.B. Metzler, 674-80.
- , 2018, „Geselligkeit“, Hg. von Hans-Peter Müller und Tilman Reitz, *Simmel-Handbuch: Begriffe, Hauptwerke, Aktualität*, Berlin: Suhrkamp, 246-50.
- 芦川晋、二〇〇三、「社会の零度——G.ジンメルの社交論とG.ベイトソンのダブル・バインド理論を手がかりに」佐藤慶幸・那須壽・大屋幸恵・菅原謙編著『市民社会と批判的公共性』文真堂、一八二・二〇七。
- Bülow, Friedrich, 1969, „Geselligkeit“, Hg. von Wilhelm Bernsdorf, *Wörterbuch der Soziologie*, Stuttgart: Enke, 354-5.
- 廳茂、一九九五、『ジンメルにおける人間の科学』木鐸社。
- , 二〇〇〇,「もう一つの『日常』論——N・アインシュタインの『日常』の社会学構想(上)」『近代』八六：一・五〇。
- , 二〇〇一,「もう一つの『日常』論——N・アインシュタインの『日常』の社会学構想(下)」『近代』八七：一・八一。
- , 二〇〇五,「G・ジンメルにおける『理解』問題」『ディルタイ研究』一六：三〇・七一。
- , 二〇〇六,「思想史の中の〈市民社会〉——F・テンニースにおける〈市民社会〉問題」『社会学雑誌』一二三：一一・四九。
- , 二〇〇八,「ジンメルの生涯と業績」早川洋行・菅野仁編『ジンメル社会学を学ぶ人のために』世界思想社、二・二二。
- , 二〇一五,「G・ジンメルの『規範化様式』論(中)」『近代』一一三：一・五三。
- Curtius, Ernst Robert, 1932, *Deutscher Geist in Gefahr*, Stuttgart und Berlin: Deutsche Verlags-Anstalt (南大路振一訳「一九八七」『危機に立つドイツ精神』みすず書房)。
- D., 1919, „Rezension Grundfragen der Soziologie von Georg Simmel (Sammlung Göschel)“, Berlin und Leipzig, G. J. Göschen

- Verlagbuchhandlung, "Deutsche Revue 44: 190-1.
出口剛司、二〇〇九、「ジンメルを媒介とした社会学史の書き換えの試み——ジンメルとフランクフルト学派というユニークな問題設定によせて」『ジンメル研究会会報』一四：二七・三〇。
Eisler, Rudolf, [1927]1984, *Wörterbuch der philosophischen Begriffe Bd. 1*, Kyoto: Rinsen Book.
Fischer, Joachim, 2021, "Soziologie," Hg. von Jörn Bohr, Gerald Hartung, Heike Koenig, Tim-Florian Steinbach, *Simmel-Handbuch. Leben - Werk - Wirkung*, Stuttgart: J. B. Metzler, 489-93.
Freyer, Hans, 1931, *Einführung in die Soziologie*, Leipzig: Quelle und Meyer (阿閉吉男訳、一九五五、「社会学入門」角川文庫。)
Gehring, Axel, 1969, "Die Gesellschaft: Überlegungen zu einer Kategorie der klassischen Soziologie," *KZ/SS* 21: 241-55.
Götte, Karl-Heinz, 1996, "Gesellschaft," Hg. von Gregor Kalivoda, Heike Mayer, Franz-Huber Robling, Thomas Zinsmaier, *Historisches Wörterbuch der Rhetorik. Band 3: Eup-Hör*, Tübingen: Max Niemeyer, 907-14.
Habermas, Jürgen, 1989, "Soziologie in Weimar Republik," *Texte und Kontexte*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 184-204. (斎藤真緒訳、二〇〇六、「ワイマール共和国の社会学」佐藤嘉一・井上純一・赤井正二・出口剛司・斎藤真緒訳、「テキストとコンテキスト」見洋書房、一九五・二二六。)
早川洋行、二〇〇三、「ジンメル社会学理論——現代読解の試み」世界思想社。
——、二〇二〇、『われわれの社会を社会学的に分析する』ミネルヴァ書房。
Hinrichs, Wolfgang, 1974, "Gesellschaft, gesellig," Hg. von Joachim Ritter, *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd. 3, Basel: Stuttgart: Schwabe, 455-8.
Hoffmann, Stefan-Ludwig, 2006, *Civil society, 1750-1914*, Basingstoke/New York, N.Y.: Palgrave Macmillan. (山本秀行訳、二〇〇九、『市民社会と民主主義1750-1914』岩波書店)
茨木竹二、一九八四、「ドイツ社会学の動向——制度的確立をめぐる実証主義と保守主義の統一戦線」『社会学史研究』六：三〇・四七。
伊藤守、一九九二、「現代社会と社交性——リースマンからジンメルへ」小林修一・福山隆夫編、『社会のイメージ——社会的メタファーの諸相』梓出版社、二〇四・一七。
岩崎卯一、一九二六、『社会学の人文と文獻』刀江書院。
居安正、二〇〇〇、『ゲオルク・ジンメル——現代分化社会における個人と社会』東信堂。
Jaworski, Gary Dean, 1997, *Georg Simmel and the American Prospect*, Albany: Suny Press.
Jung, Werner, 2016, *Georg Simmel zur Einführung*, Hamburg: Junius Verlag.
菅野仁、一九九六、「問題」としての「近代」——ジンメルの場合』堀田泉編『近代』と社会の理論』有信堂、二五・四四。
——、二〇〇三、『ジンメル・つながりの哲学』NHKブックス。
北川東子、一九八六、「ゲオルク・ジンメルの「理解」の理論」『外国語科研究紀要』三三(四)：一〇一・三七。
——、一九八七、「対話」の主題化と「社交性」の概念」『外国語科研究紀要』三五(一)：一・二四。
——、一九九〇、「社会学理論における「文化の思考」——あるい

- は「社会学的美学」がもたらす可能性について」『教養学科紀要』二二三・二二九・六五。
- 、一九九二、「ゲオルク・ジンメルと「社会の物語」」『現代思想』一九（八）：一九〇・九。
- 、一九九七、『ジンメル——生の形式』講談社。
- 、二〇〇七、『ジンメル』『哲学の歴史9——反哲学と世紀末』中央公論新社、五〇三・三八。
- Köhnke, Klaus Christian, 1986, „Nachwort“, Moritz Lazarus, *Über Gespräche*, Berlin: Hensel, 47-54.
- 忽那敬三、一九九二、「先取りされた精神の全体性」三宅晶子他編、『感覚変容のダイアレクティーク——世紀転換期からナチズムへ』平凡社、二九二・二〇八。
- Levine, Donald Nathan, Carter, Ellwood B., Gorman, Eleanor Miller, 1976, “Simmel’s Influence on American Sociology. II,” *American Journal of Sociology*, 81(5): 1112-1132.
- Liechbau, Klaus, 1996, *Kulturritze und Soziologie um die Jahrhundertwende: Zur Genealogie der Kultursociologie in Deutschland*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- 、2009, „Einleitung“, Georg Simmel *Soziologische Ästhetik* Hg. von Klaus Liechbau, Wiesbaden: VS Verlag, 7-28.
- 、2018, „Anfänge der Soziologie in Deutschland (1871-1918)“, Hg. von Stephan Moebius und Andrea Ploder, *Handbuch Geschichte der deutschsprachigen Soziologie Bd. I*, Wiesbaden: Springer, 11-36.
- M., 1918, „Simmel, Georg: Grundfragen der Soziologie Sammlung. (Sammlung Götschen, Nr. 101)“, Berlin W 10, G. J. Götschense. Dmk. 1 M., *Geisteskampf der Gegenwart*, 54 (5): 104.

- 正村俊之、二〇一〇、「ジンメルと近代的思想圏——原理論・方法論における第三の立場」『社会学研究』八七：三一・六八。
- 松本拓、二〇〇九、「ジンメル社交論の再検討」『龍谷大学社会学部紀要』三五：一一六・二六。
- Moebius, Stephan, 2017, „Die Geschichte der Soziologie im Spiegel der Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie in KZfSS“, *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 69 (1 Supplement) [Sonderheft 56]: 3-44. (梅村麦生訳、二〇一八、『ケルン社会学 社会心理学雑誌』(KZfSS)にみる社会学の歴史(上)』『京都社会学年報』二六：一二三・四七。)
- 、2021, *Sociology in Germany. A History*. Cham: Palgrave Macmillan.
- Mozetić, Gerald, 2018, „Anfänge der Soziologie in Österreich“, Stephan Moebius und Andrea Ploder (Hg.), *Handbuch Geschichte der deutschsprachigen Soziologie, Bd. I*, Wiesbaden: Springer, 37-64. (田村豪訳、二〇二一、『オーストリアにおける社会学のはじまり』『社会学雑誌』三八：一七〇・二〇四。)
- 村上淳、一九八六、「ゲオルク・ジンメルにおける個人・社会・文化」片岡輝夫他『古代ローマ法研究と歴史諸科学』創文社、三七一・九七。
- Müller, Hans-Peter, 2018, „Einführung“, *Simmel-Handbuch: Begriffe, Hauptwerke, Aktualität*, Berlin: Suhrkamp, 11-90.
- N. N., 1919, „Rezension Georg Simmel. Grundfragen der Soziologie (Individuum und Gesellschaft)“, Berlin 1917, Nr. 101. (103 S) Mk. 1.25, „*Lehrerbildung*“, 4: 18.
- 中久郎、一九七七、「社会学における社会概念の構成」『京都大学文

學部研究紀要』一七・五五・二〇四。

西村稔、一九九八、『文士と官僚——ドイツ教養官僚の深淵 木鐸社。野口雅弘、二〇一二、『解説——「決められない政治」についての考察」カール・シュミット・大久保和郎訳『政治的ロマン主義』みすず書房、二五一・六六。

——、二〇一六、『ゲオルク・ジンメルとカール・シュミット——ベールリン、シュトラスブルク、そして「社交」』ジンメル研究会会報』二二・一・一四。

岡澤憲一郎、一九九三、『社交性』森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』有斐閣、六六四。

——、二〇一五、『ゲオルク・ジンメルの思索——社会学と哲学』文化書房博文社。

大貫敦子、二〇〇一、『排除された〈私〉の言葉——ドイツ市民社会における公共圏形成の言説とジェンダー』『思想』九二五・八二・一〇四。

Rammstedt, Ortheim, 2020, „Geselligkeit“, Hg. von Werner Fuchs-Heinritz, Daniela Klimke, Rüdiger Laumann, Ortheim Rammstedt, Urs Stäheli, Christoph Weischer und Hanns Wienold, *Lexikon zur Soziologie 5. überarbeitete Auflage*, Wiesbaden: Springer, 269-70.

Ringer, Fritz K., 1969, *The Decline of the German Mandarins: The German Academic Community, 1890-1933*, Cambridge: Harvard University Press. (西村稔訳、一九九一、『読書人の没落』名古屋大学出版会。)

櫻井佳樹、二〇一四、『近代西洋社会におけるマナーと社交性』矢野智司編『マナーと作法の人間学』東信堂、三四・六七。

作田啓一、一九八〇、『ロマン主義を超えて——社会学の三つの問題』『歎ばしき学問』岩波書店、三五・五七。

Schmid, Conrad, 1918, „Soziologie“, *Sozialistische Monatshefte*, 24, 163-6. Schmitt, Carl, 1925, *Politische Romanik 2. Auflage*, Berlin: Duncker & Humblot. (大久保和郎訳、二〇一二、『政治的ロマン主義』みすず書房。)

Schneider, Nela, 2010, *Die Dialektik von Gemeinschaft und Gesellschaft*, Berlin/Boston: De Gruyter.

Sieckel, Paul, 1920, „Rezension: Georg Simmel, Grundfragen der Soziologie (Individuum und Gesellschaft). Sammlung Göschen. Berlin und Leipzig 1917. 103 S.“, *Archiv für systematische Philosophie*, 25: 118-12.

Simmel, Georg, [1903] 1995, „Die Großstädte und das Geistesleben“, *Georg Simmel Gesamtausgabe* * Bd. 7, Berlin: Suhrkamp, 161-31. (川村二郎訳、一九九九、『大都市と精神生活』『ジンメル・エッセイ集』平凡社、一七三・二〇〇。)* 以下 GSG と略記。

——, [1911] 2001, „Soziologie der Geselligkeit“, *GSG Bd. 12*, Berlin: Suhrkamp, 177-93.

——, [1913] 2010, „Ethik und Probleme der modernen Kultur (1913) von Adolf Löwe“, *GSG Bd. 21*, Berlin: Suhrkamp, 847-90.

——, [1917] 1999, *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft, GSG Bd. 16*, Berlin: Suhrkamp, 59-150. (居安正訳、二〇〇四、『社会学の根本問題——個人と社会』世界思想社。)

Spann, Ohmar, 1923, *Gesellschaftslehre*, Leipzig: Quelle & Meyer.

Steinmann, Lars, 2007, „Geselligkeit und Formale Soziologie: Die lebensphilosophische Perspektive in Georg Simmels „Grundfragen der Soziologie““, Hg. von Carsten Klingemann, *Jahrbuch für Soziologiegeschichte*, Wiesbaden: VS Verlag, 9-29.

Susman, Margaret, 1958, „Erinnerung an Georg Simmel“, Hg. von Kurt

- Gassen und Michael Landmann, *Buch des Dankes an Georg Simmel: Briefe, Erinnerungen, Bibliographie*, Berlin: Duncker & Humblot, 278-91.
- 田村豪, 「二〇一〇」 「社交性の社会学」序説——G・シムメルとE・ゴッマンにおける社交性論の境界」『社会学雑誌』三七: 一七五-九二。
- , 「二〇二二a」 「シムメル社交論の再構成——仮構・象徴・律動」『社会学史研究』四四: 七三-九一。
- , 「二〇二二b」 「没後一〇〇年のドイツ語圏におけるシムメル研究——「シムメル・ハンドブック」(二〇一八)の紹介」『社会学雑誌』三九: 二二二-二二七。
- Thouard, Denis und Frank, Dirk, 2010, „Interview mit Alfred Grosser-Gasprofessor Denis Thouard“, (最終閲覧日二〇二三年五月二五日) <https://aktuelles.uni-frankfurt.de/gesellschaft/interview-mit-alfred-grosser-gasprofessor-denis-thouard/>.
- Tönnies, Ferdinand, [1935]2019, *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*, Hg. von Bettina Clausen and Dieter Haselbach, *Ferdinand Tönnies Gesamtausgabe Bd. 2*, Berlin/ Boston: De Gruyter. (杉之原寿一訳一九七九『ゲマインシャフトとゼゼルンシャフト——純粹社会学の基本概念(上・下)』岩波書店。)
- Troelsch, Ernst, [1911]2014, „Das stoisch-christliche Naturrecht und das moderne profane Naturrecht“, Hg. von Trutz Rendtorff, *Ernst Troelsch Kritische Gesamtausgabe Bd. 6*, Berlin/ Boston: De Gruyter: 71-72. (住谷一彦・小林純訳一九八二, 「ストア的ニキリスト教的自然法と近代的世俗的自然法」『キリスト教と社会思想』ヨルダン社, 二二七-二二九)。
- , [1919]2010, „Rezension: Grundfragen der Soziologie (1917); Der Konflikt der modernen Kultur (1918)“, Hg. von Friedrich Wilhelm Graf, *Ernst Troelsch Kritische Gesamtausgabe Bd. 11*, Berlin/ New York: De Gruyter, 460-3.
- Vierkand, Alfred, 1919, „Rezension: Simmel, Grundfragen der Soziologie,“ *Deutsche Literaturzeitung* 1, Februar, Nr. 5: 99-101.
- , 1923, *Gesellschaftslehre. Hauptprobleme der philosophischen Soziologie*, Stuttgart: Ferdinand Enke.
- , 1928, *Gesellschaftslehre. 2., völlig umgearb. Auflage*, Stuttgart: Ferdinand Enke.
- Weber, Max, [1910]1924, „Geschäftsbericht“, Hg. von Marianne Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik*, Tübingen: J.C.B. Mohr, 431-49. (中村貞二訳一九八二, 「ドイツ社会学会の立場と課題」出口勇蔵・松井秀親・中村貞二訳『完訳・世界の大思想——ウェーバー社会科学論集』河出書房新社, 二〇七-二三四)。
- Wiese, Leopold, 1924, *Allgemeine Soziologie als Lehre von den Beziehungen und Beziehungsbildern der Menschen Teil I. Beziehungslehre*, München: Duncker & Humblot.
- , 1929, „Geselligkeit“, Hg. von Deutsche Gesellschaft für Soziologie (DGS), „Soziologie und moderne Gesellschaft: Verhandlungen des 14. Deutschen Soziologenges von 20. bis 24. Mai 1929 in Berlin, Stuttgart: Ferdinand Enke, 3-7.
- Wilhelmy-Dollinger, Petra, 2000, *Die Berliner Salons. Mit kulturhistorischen Spaziergängen*, Berlin/ New York: De Gruyter. (糟谷理恵子・斎藤尚子・畑澤裕子・林真帆・茂蔵保代・渡辺芳子訳, 二〇〇三『ベルリンサロン』鳥影社。)
- Wurm, 1920, „Rezension Georg Simmel. Grundfragen der Soziologie

(Individuum und Gesellschaft). Berlin und Leipzig 1917, Götschen. 8. (103)
(Sammlung Götschen), „*Soziale Kultur. Der Zeitschrift Arbeiterwohl und
der Christlich-Sozialen Blätter neue Folge*“, 40: 79.

山崎正和、二〇〇六、『社交する人間——ホモ・ソシアビリス』講談
社学術文庫。